

認知神経リハビリテーションが『現象としての身体』に及ぼす影響 - SCATによる検討 -

○高木 泰宏¹⁾ 上田 将吾¹⁾ 塚田 遼²⁾ 山中 真司²⁾ 吉田 俊輔¹⁾ 加藤 祐一¹⁾

- 1) 結ノ歩訪問看護ステーション
- 2) 結ノ歩訪問看護ステーション東山

【はじめに】

Merleau-Ponty (1945) は身体について『客体としての身体』と『現象としての身体』とを区別し、身体とは両義的であると述べている。大島 (2014) は『現象としての身体』を端的に言うとは個々人の経験的・主観的身体であり、生物・心理・社会モデルに従うと述べている。本研究は神経難病当事者の語りから質的に分析し、認知神経リハビリテーション（認知神経リハ）が『現象としての身体』へ及ぼす影響が示唆されたため、報告する。

【方法】

対象は遺伝性痙性対麻痺と診断され、9年が経過した10代後半女性である。認知神経リハを開始して4年が経過している。対象者に半構造化面接を実施し、録音した音声から逐語録を作成した。質問項目は身体変化の経緯、リハに対する想いの経緯、改善の意味とした。解析方法として、Steps for Coding and Theorization (SCAT) を用いた。SCATフォームの手順に沿って逐語録から構成概念を生成した。得られた構成概念を用いてストーリーラインを作成し、一般化したものを理論記述として作成した。

【結果】

分析から38個の構成概念が生成され、3つの理論記述が作成された。①認知神経リハにより思考と身体イメージの差異が減少し、身体のみとまりが形成される。②①により運動イメージを生成することが可能となり、日常生活で行動をするための内的規範が形成される。③神経難病に罹患していることから自身の身体を正常でないものとして捉えていたが、認知神経リハにより自身で予測可能な身体として捉えることが可能となる。

【考察】

認知神経リハでの経験は身体イメージや運動イメージを形成する身体面に影響するだけではなく、社会と関わるための内的規範の形成や病状の捉え方の変化の心理・社会面にまで拡張して影響すると考える。このことから認知神経リハは『現象としての身体』に影響することが示唆された。

【倫理的配慮（説明と同意）】

ヘルシンキ宣言に基づき、対象者と保護者に説明し、同意を得た。